

## 第10回テーマ：六甲おろし ～今昔物語～



暖炉を囲んで

## 講演内容

- ①現在の六甲おろし
  - ・阪神タイガース応援歌考
- ②古典から見る六甲山系
  - ・百人一首他
  - ・黄葉するネザサ
- ③六甲山の植物

実施日：平成16年1月17日（土）  
午後1時～3時40分  
場 所：六甲山YMCA 里見ホール



講師：近藤 浩文さん

## プロフィール

昭和6年 神戸市魚崎生まれ  
昭和27年神戸大学教育学部  
卒業、京都大学植物学教室で  
研修。環境カウンセラー（環  
境省）、兵庫県環境審議会委  
員、兵庫県自然保護指導員

## 今年一番の大雪に恵まれた！？

セミナーの前夜からどんどんと冷え込み、翌日の積雪の対応に苦慮しました。天気予報の通り、六甲山は一面雪景色となりました。25名の熱心な参加者が揃い、「雪の六甲山はすばらしい」と異口同音に感激。「よくぞ皆さん来てくれました」と、スタッフ一同も感謝の気持ちでいっぱい。最高の雪景色と参加者に恵まれた一日になりました。



里見ホールのテラスで雪だるまづくり

## 近藤さんの軽妙な語り口

阪神大震災の9周年の日ということで、全員で1分間の黙とうを捧げ、講演へと進みました。

スピーカーの近藤浩文さんは植物学を専門とされ、六甲山通として有名な方です。また、環境保全活動に対する助言などを行う環境カウンセラーとしても活躍されています。震災、阪神タイガース、六甲おろし、和歌、笹、六甲山の植物など幅広い知識と話題を紹介していただきました。

特に植物については、もっとご紹介いただきたいのですが、時間切れとなりました。近藤さんの軽妙な話しぶりに魅せられ、含蓄と専門知識の豊かさに引き込まれた1時間余りでした。

## 六甲山の思いを新たにしました

講演の質疑応答に入る前に休憩をしました。里見ホールの暖炉を囲んだり、窓の外に雪景色を眺めたりしてくつろぎました。新年で特別に用意した、おしるこ、甘酒等も味わっていただきました。

終盤の懇談会では、それぞれが自己紹介をしながら六甲山についての思いや魅力など語り、六甲山への愛着を一層強めました。熱心な聞き手に集まっただき、また当日入会していただいた方もおられ、この市民セミナーが着実に歩んでいると実感しました。

## 参加の感想 あけびグループ 中務勝子さん

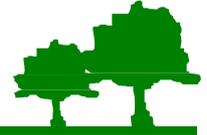
六甲山上は一面の銀世界。部屋の中は赤々と暖炉の火、窓の外は降りしきる白い雪とまるで別世界でした。平安時代の和歌の中にも六甲嵐が詠まれていて、1000～1200年前から六甲嵐を肌で感じて使っていた等、和歌の中に詠まれている笹や植物などの見本を手にとりながら、名前の由来や種類などユーモアたっぷりのお話に、私達もつつこみをいれたり、ボケたりと参加者と先生と一体化し、あっという間に時が過ぎ、六甲山の冬の楽しさ、美しさ、厳しさを感じた一日でした。

主催：六甲山自然保護センターを活用する会

後援：兵庫県神戸県民局 兵庫県立人と自然の博物館  
灘区役所



# テーマ：六甲おろし～今昔物語～



## 第10回市民セミナーの流れ

### 市民セミナー

1. 昼食懇親 : 12:15～13:00
2. 挨拶案内 : 13:00～13:20
3. 講演 : 13:20～14:40
4. 質疑応答 : 14:50～15:15
5. 懇談会 : 15:15～15:40

### 講演

- ①六甲おろしとは
- ②現在の六甲おろし
  - ・阪神タイガース応援歌考
- ③古典から見る六甲山系
  - ・百人一首他
  - ・黄葉するネザサ



## 講演のあいさつ(近藤 浩文さん)



軽妙な近藤節

1月に冬の六甲山の講演ということで何を話そうかと困りました。昨年は阪神タイガース優勝でファンは何百回と「六甲おろし」を絶唱しましたが、この「六甲おろし」について、今と昔の様子をご紹介しますと思います。

### 講演内容

#### 六甲おろしとは

「六甲おろし」とは「比叡おろし」「伊吹おろし」などのように、晩秋から初冬にかけて遠い北の大陸から吹き出した寒風が、それぞれの山を越えて吹き下ろす強風のこと。天気図で見れば、「西高東低」冬型の気圧配置の時に吹く風が「六甲おろし」といえる。(風速8m/s以上の木枯し)



阪神優勝の号外

#### 西高東低の気圧配置



#### 現在の六甲おろし ～阪神タイガース応援歌～

♪六甲風に颯爽と、蒼天翔る日輪の～♪阪神タイガースの歌、通称「六甲おろし」。しかし、「六甲おろし」は晩秋から吹く風で、ペナントレースが終わる頃。作詞をされた佐藤惣之助さんはきっと日本一になることを想定して作られたのではないだろうか考える。(近藤さんの説、笑い)

ちなみに昨年の9月15日、10月23日も西高東低の気圧配置で、天気図までも阪神タイガースのユニホームの縦縞模様になったとは…。

#### 昔から詠まれていた六甲おろし

「六甲おろし」を歌っているのは現在の阪神タイガースファンだけかと思いがちだが、実は、今は昔、平安から鎌倉時代の日本古来の和歌集でも詠まれている。

有間山おろすあらしの吹きよせて  
あなの笹原もみじしにけり 藤原堅隆(夫木和歌抄)

有間山とは六甲山のこと。おろすあらしはまさに「六甲おろし」である。あなの現在の伊丹周辺の台地。六甲おろしが吹いて、猪名野の笹原が一面黄色くもみじしたと詠んでいる。その笹は六甲山麓一帯に多く自生し、秋から冬の木枯らし「六甲おろし」で黄葉するネザサと考察できる。黄葉するネザサを「ささもみじ」という。枯れたとは言わずにもみじするというのは風情豊か。約千年前の当時のこの付近の自然環境が推察できる貴重な短歌だ。



黄葉するネザサ

#### 六甲山系のササ

##### ミヤコザサ :

冬、葉のふちに白い隈どりができるので 通称クマザサと呼ばれている。葉の裏面に毛が密生する。標高500～600m以上に多く自生。

##### スズタケ :

太平洋側のブナの林床に多く、六甲山では紅葉谷や住吉谷、徳川道などで見られる。



ミヤコザサ



スズタケ

##### ミヤコザサとスズタケの違い :

節が丸々としているのがミヤコザサ、節から枝が出て枝分かれしているのがスズタケ。

有間山あなのささはら風吹けば  
いでそよ人を忘れやはする 大貳三位(百人一首)  
吾妹子に猪名野は見せつ名次山  
角の松原いつか示さむ 高市黒人(万葉集)  
しなが鳥猪名野を来れば有間山  
夕霧立ちぬ宿はなくして 読み人しらず(万葉集)

さらに、六甲山系に関係する様々な歌、万葉時代の西宮の地形、えびす神社、広田神社の由縁等々を詳しくお話しいただいた。

## 六甲山の植物を紹介

続いて、サルトリイバラ、サネガズラ、ヤブツバキ、サルナシ等、六甲山の植物を、現物を見せながら、名前の由来などを説明いただいた。

時間の都合により、話を途中で切り上げることになり、続編をお聞きしたいという声があがった。



名前の由来を説明

## 近藤先生のみとめ

21世紀の今日、多くの阪神タイガースファンが絶唱した「六甲おろし」ですが、実は、すでにはるか万葉の時代、そして平安～鎌倉時代の人々によって肌身に感じて詠まれていたのです。冗談を交えながらの講演でしたが、いくつか覚えて帰ってもらえればと思います。ありがとうございました。



山西 一平さん



三村 栄三郎さん

## 懇談会

自己紹介の後、それぞれの六甲山についての魅力や楽しみ方等、意見を交わし新年の思いを新たにしていた。

※参加者主体という特色を強めるために、今回はお二方に感想をお願いしました。表紙記載の中務さん、山田さん、ご協力ありがとうございました。

### 参加の感想 山田 良雄さん

「六甲おろしと植物のお話」どうつながるのかと講演をお聞きしていると、小倉百人一首～ありまやま～を切り口に、六甲の笹の種類・高度差による植生の観察、と素人には大変わかりやすいお話で嬉しくお聞きしました。



講演後の懇談会は、幹事の上手な司会で全員が発言し、こもごも山と自然への愛着による参加動機が語られました。野次馬の私は「面白そう」の不純な動機ながら、見当違いの発言にも丁寧に教えていただけるのを楽しんでいます。

## ◆参考・配布資料：

講演レジュメ配布

## ～書籍紹介～

『六甲山の植物』 近藤浩文（共著）  
神戸新聞総合出版センター  
2300円（税別）

『六甲山』（登山・ハイキング案内）  
近藤浩文（共著） 山と溪谷社  
六甲博物誌（四季の花）  
解説・写真担当・執筆  
1200円（税別）



近藤さんへのお問い合わせは当会事務局にご連絡下さい。



近藤さんを囲んで記念撮影

## 参加者の声 アンケートより

### ◆セミナーの感想

近藤さんの博識と笑いを交えた話に感心した。平安時代、万葉集の話が良かった。軽妙な語り口と文学・歴史・自然学と幅広い話題で、あっという間に時間が過ぎてしまった。全ての事が耳新しく面白く居眠りの間がなかった。

### ◆冬の六甲山の印象など

子供の頃の耐寒ハイクを思い出した。裏六甲と表六甲の景色（雪）の違いに驚いた。六甲山の雪景色は初めての体験で感動した。足跡のない雪道、何の音もしない静けさに感激。

### ◆阪神大震災9周年について一言

何年経ってもあの時の「恐さ」を忘れない。よくここまで立ち直ったと思う。災害はまたやって来る。心の準備・物の準備・人のつながりを大切にしたいと改めて思った。人間に出来ない事はないような錯覚をしているが、実は大自然の前には何とも無力なものであることを再確認すべき。

### ◆参加者：25名（順不同・敬称略）

近藤 浩文	石田 澄子	青木 孝子	中務 勝子
山田 良雄	山西 一平	三村栄三郎	西尾 智明
山本 悟而	山田 勇	八木 浄	朝比奈 洋
兼貞 力	長尾 雅人	松島 朋子	村岡 義博
山脇 俊哉	堂馬 英二	米村 邦稔	松井 光利
那波 昌彦	小野 律子	藤井宏一郎	中野 一
菖蒲 美枝			